

ケネディ内閣の閣僚たち

——農務長官と内務長官——

清 水 良 三

目 次

- 一 はじめに
- 二 本文——農務長官と内務長官——

一 はじめに

ジョン・F・ケネディ内閣の閣僚について私は既に国士館大学政経学会誌（この雑誌は一号から九号まで発刊された）だけで現在は休刊となっている）や国士館大学政経論叢などに国務長官や国防長官や財務長官や労働長官などの人々の入閣過程を書いているが今回は農務長官と内務長官について述べる事とした。ケネディの暗殺はアメリカ世界に

ケネディ内閣の閣僚たち（清水）

陽性の建国理念追求的理想主義と陰性の盲目的資本主義的拝金主義がはっきりと対立して併存している事を明示した。ケネディの選出した閣僚はいずれもアメリカ民主主義の本来の理想に忠実な憧憬を抱く人たちであって、而もアメリカ建国の理想を知性的に分析してこれを一九六〇年初期の世界に適用しようとした現実派である。同じように現実対応でも常に根幹にワシントンやジェファースンやリンカーンが考えていたものを包容しているから、ただ単に自分たちの世代の生きている世界だけを観察や分析の対象として、其の期間の繁栄のみを重要視する現実派とは意見が合わない。ケネディが誤解されたのはそれが原因である。従ってケネディが閣僚を選ぶに当って重視したのは現実分析の場合における歴史的感覚であった。Orville Freeman も Stewart Udall もこの様な視点から選ばれたのである。歴史の変化は烈しくかつては日本の青年たちの夢と希望をかきたたせてくれた大統領も、今では遠い過去のものとなり、時々人々の話題に上る程度であるがジョン・F・ケネディは、アメリカの理想に対して忠実なる態度を以て接した偉大な大統領の一人であり、些細なる欠点を論あやつちうことよってアメリカの政治史上から消去し得る存在ではない。それは彼の第二次世界大戦中の行動や、大統領就任の際の、かの有名過ぎるために、引用すると却ってマンネリズムのそしりを受けかねない演説や、或いは彼が大学在学中に書いたもの等によって、察知出来る。彼は民主政治の理想に対して忠実であり、権力を権力として愛したことはない。彼はあらゆる人に対して誠実であり権力故に人を圧倒することはなかった。其のため彼の周囲には、アメリカ民主政治の本来の理想に共鳴する人たちが自然に集まったのであり、権謀術数利害衝突の政治の世界の中にありながら人間対人間の魅力的な個人関係が生まれたのである。私の恩師である細野軍治博士（法博・ケネディ大統領の就任式に招待された唯一の日本人・国際法学者・「軍縮の歴史」でコロンビア大学よりPH・Dを取得・元早稲田大学講師青山学院大学教授）も同大統領の気取りの無いこと、

すべての人に誠実であることに感銘して、彼に真底からほれ抜いた一人であった。Stewart Udall・Orville Freeman
両氏のケネディとの関係の背景にも、同じような人間関係から来る相互牽引があったのであり、民主政治の理想と夢
がこの二人を大統領の内閣に参加させたのである。なおカロール・キルパトリック氏はこの二人の特徴をあらわすの
に「自然資源の保護者」という言葉を使用している。(一九八九年十二月廿四日)

二 本文―農務長官と内務長官―

一九四三年一月七日、マラリヤの跳梁しているソロモン群島・ブーゲンビルの奥深いジャングルを六〇人の海兵
隊の偵察縦隊が進んでいた。彼らは日本軍が航空基地への補給路として使っていたヌマヌマの隘路を発見しようとし
ていたのである。二日間にわたる骨の折れる搜索に成功しなかった偵察隊はエムプレス・オーガスタ湾西端の基地に
向って引き返した。オーヴィル・L・フリーマン中尉は此の縦隊の先頭を指揮官として歩いていた。突然、一五フィ
ート前方にフリーマンは一団の日本兵を発見した。フリーマンも驚いたが日本兵も同じように驚き、すぐ発砲した。
フリーマンは丸木の蔭にかくれ射撃を開始した。匍匐している日本兵に彼が標準を合わせた時、敵弾が顎のつけ根を
首すじにかけて貫通し、右の肩甲骨のところまで入ってとまった。

熱くなって開いている傷口を、彼は右手でそーっと触ってみた。それからはげしく嘔吐しはじめた。数刻後、日本
兵たちが姿をかくした時、隊員がフリーマンの側に来てモルヒネの注射をした。頭脳の近くに怪我をした人にモルヒ
ネの注射をすることは一番悪いことであったが、ともかくフリーマンは死なずに済んだ。隊員は深いジャングルの中

を彼をかついで進んだが、彼らは別の日本の斥候隊に遭遇した時に、フリーマンを投げないように地上に下ろした。

その夜フリーマンはひどく苦しんだ。一度は彼は部下に彼を捨てて行くよう命令した。隊員の一人は「隊長、われわれは貴方を捨てて行くつもりはありません。一緒に脱出して貰わなくてはなりません」と言った。この海兵隊がキャンプに着いたのは、翌日の日暮であった。

原始的なブーゲンビル海浜の病院で二日間手当を受けたフリーマンは、それから船でガダルカナルの野戦病院に運ばれた。そこで軍医は彼の肩の皮の下へ親指をつっこんで弾丸を取り出した。それからニューカレドニアの病院に一ヶ月いたが、そこでフリーマンの頸骨は針骨でしばられた。さらにカリフォルニア、オークランドの病院で苦痛の六ヶ月をすごした後、彼は次第に顎を使えるようになり、再び話すことが出来るようになった。

二十五歳のフリーマンを戦線から離れさせた日本兵の弾丸が発射されたのは、日本の駆逐艦がソロモン群島ブラケット海峡のそう遠くない沖合で、当時二十六歳で米国海軍予備軍の中尉（ジュニア・グレード）であり、後に、退役したジョン・F・ケネディが指揮する魚雷艇一〇九をまっ二つに裂いてから、ちょうど三ヶ月と七日後であった。

それから八ヶ月後、地球の反対側では二四歳のスチュアート・L・ニューダル技術軍曹が「帰郷」という名前のB二四爆撃機の胴座砲手として、オーストリア、リンツのゲーリングのタンク工場を爆撃するために、イタリーのフォッヂアを飛び立った。ちょうど其の日に限って機首の砲手が病気であったので、胴座砲手のニューダルが彼に交代するよう命令された。そしてニューダルが慣れている胴座砲の席には、ニューヨーク州北部出身の新兵が入った。

「帰郷」が目標に近づいた時、猛烈な戦闘がおこった。高射砲射撃はまことに激烈であったが、さらに烈しかったのはドイツのME一〇九型機の編隊からの機関銃および二〇ミリ・キャノン砲火であった。「帰郷」は銃弾のために

穴だらけになった。キャノン砲の一弾が命中し機の胴体を貫いてユードルに代って胴座砲席にいたニューヨーク州の若者を即死させた。だがその機は目標に突撃し爆弾を投下して、基地に帰ろうとした。だが大きな損害を受けていたその飛行機からはガソリンが大量にもれていたの、搭乗員たちはいつ爆発するかとその事ばかり恐れれていた。機長はうっかり誰かが火をつけたりしないように、すべてのマッチ、ライター、煙草を機外に捨てるよう命令した。かたむきながらも遂にその飛行機が基地に到着した時には、ブレーキがきかなくなっていた。乱暴にも傾きながら着陸して行った「帰郷」は、何台かの飛行機に接触しそうになり格納庫にもぶつかりそうになったが、飛行場の端に来てとまり、爆発しないで済んだ。

それから暫くして五〇回の飛行作戦を完了したユードル技術軍曹は本国に送還された。この戦争は、ケネディ、フリーマン両氏が経験したさらに近い死との接触到に劣らないほどの、深い印象を彼の心に残した。戦争の終りにあたってユードルは彼の感情と信念を紙上に記録しておこうとした。彼は彼の将来を「平和な風潮を確保する努力」に捧げることを誓い、その信条を個人的に書き残しているが、その紙の最後に彼の行動の今後の限界基準が次のように列挙されている。

「私の忠誠心が、人の心を傷つけることになっても私は自己の忠誠心に従う。たとえ私があるの人に魅力を感じ尊敬を感じていてもそうである」

「私の支持している考えが、たとえ危なくなっても、私は自分の手を引込めると言うことはしない。それを引込めることが立派な行儀作法に適っていてもそうである。」

「私のいる場所で小数グループの人たちが不当に非難されたならば、私はそれらの小数グループの人たちに味方す

る。それは丁度私自身の所屬する小數グループが攻撃されたならば、彼らに私自身のグループを弁護して貰いたいと期待するのと同様である」

「もしも私の信念が、他人から急進的と看做されるであろうようなやり方をするのを、私に要求するならば、私は敢てそういうやり方をするだろう」

「もしも発言することが、權威の失墜をもたらしたり物質的な収入の削減をもたらしても、私は発言を控えることはしないだろう」

「原子爆弾の破壊的脅威にさらされている今日においては、人はお互いに愛し合うことを知らねばならぬ。さもなければ死んでしまう」——すなわち人は以前よりもはつきりと、ユダヤのガラリア人の偉大な教訓、人は完全に知ったこともないし、まったく忘れたこともない」ということを覚らねばならぬ。私はいつもこのことを自覚しつつ、以上の信条を静かに謙虚に、しかも目的に献身する力強さをもって実行しよう。」

戦争は決してケネディ大統領と、この国の自然資源に責任を有するこの二人の人物との、ただ一つの共通の基盤ではない。農務長官フリーマンと内務長官ユードルは大統領と同様に、多くの種類の試練をくぐって来たのである。スポーツにおいて彼らはすべて優れていたし、知識的な競争において彼らは最高の榮譽を得たし、また、政治において彼らは成功の習慣と権力の意味を知ったのである。

もっと重要なことは、彼らのものの考え方が接近しているという事である。彼らは独断を嫌い實際を尊ぶ。彼らは理論のみを尊ぶ人、いい加減な返事をする人を信用しない。彼らは完成した政治組織能力の持主であり、細かな準備と長期間にわたる退屈な、しかも極度に注意力をつかう作業こそ、勝利のための第一の要訣であることを知ってい

る人たちであった。

イデオロギーにおいては穩健であるが、彼らは積極的な活動主義者であった。彼らは問題が追求され解決されなければならぬと信じていた。問題を放置しておくということは殆んどなかった。心の底では彼らは頑強で鬪争的だが、妥協の重要さも心得ていた。彼らは目的について夢見るよりも、目的を実現することに興味を持っていた。彼らは同じ世代の人たちであった（一九六一年当時、フリーマン四三歳、ユーダル四一歳、ケネディ四四歳）。

三人は家系と宗教においても異っていたし、出身の州もちがっていた。大統領は東部海岸地方の金持の家に生まれたカソリックであり、フリーマンはルーテル教会のディーコン（牧師補佐役）であって、貧乏の味を知っていた。働しながらミネソタ大学に通学していた当時においてさえも、彼は家族に金の仕送りをしなければならなかった。ユーダルの家族はモルモン教徒であって、アリゾナにおいては人に知られた家族ではあったが、金持ではなかった。厳格な両親は喫煙、飲酒、ダンスを喜ばなかった。派手なケネディ一家や、烈しい前進をつづけて来たフリーマンとは違って、ユーダルの青春時代は、陰にかくれた淋しいものでさえあった。

一九六〇年にはケネディのカソリック信仰が、ただ彼にとつてのみならず、ルーテル派であるフリーマンやモルモン教徒であるユーダルにとつても問題になった。アリゾナにおいてはユーダルの批評者たちが、ユーダルは「ジャック・モルモン」であると囁いた。ユーダルは信仰心厚きモルモン教徒がするように、神の教えに忠実に従っていないし、必要と考えられるだけの時間を聖なる仕事に捧げていないと言った。さらに悪いことにはこれらの批評者たちは、ユーダルはカソリック教徒を大統領に選ぶための最前線に立っているとさえ言った。ユーダルはモルモン教徒である共和黨員とのたたかいに勝って再び議員に選出されたが、それはかつてなかったほどの僅少の差に於てであつ

た。そしてアリゾナは大統領候補としてニクソンを支持したのである。

一九五四年以来知事をやって来たミネソタにおいて、フリーマンが第四期当選を試みて失敗したのには、宗教問題が絡まっていた。選挙運動が終る四日前にフリーマンは、ミネソタにおいてばかりでなく全西部で猛威をたくましくしていた反カソリックの風潮をせきとめるべく、大演説を行なった。「私がカソリック教徒を合衆国大統領に指名し、かつその人を支持していることのために、私を「処罰」しなければならぬなどという反対に遭おうとは、夢にも思わなかった」とフリーマンは言った。彼のところに届いたとも沢山の反カソリックの手紙や文書について、このルーテル教会の牧師補佐は「この選挙運動においては有権者たちの心や気持は、他のどんな問題よりも宗教問題に注意を向けて来たのだということが、これらの手紙や文書から結論できると思う。それは政治的集会の壇上において云々されるよりも、説教壇上において論議されて来たのである」と言っている。

開票の結果ケネディはミネソタにおいて辛うじて勝ったが、力強く熱情的な知事であるフリーマンは僅少の差でやぶれた。この敗北によってフリーマンは深い打撃を受けた。それは選挙において彼がはじめて経験した負けではなかった。そして彼は逆境を何回も何回も経験して来ていたのである。だが彼は知事としての自分の成績に誇りを抱いていた。彼は他の誰よりも、この州に強力な民主党を築く事に責任があると思ひこんでいたのである。彼は前線にいた。彼は毎日火線の上にならしたのである。だが、より安全な範囲で活動して来ていた彼の旧友であり同僚であるヒューバート・H・ハンフリーは合衆国上院議員の第三期に立候補して、やすやすと勝ったのである。選挙の結果だけが他の何よりも大きな証拠であり、議会において議員の地位を確立しかつそれを維持する事が、知事として地位を確立しかつそれを維持することより容易であるということ、フリーマンは容易に納得できなかった。知事としてフリーマ

ンは「あまりにも多くのたたかいに参加しすぎた」と一人のミネソタ人は言っている。「歓迎する人たちの気持をあきさせてしまったのだ」。

この年はフリーマンにとって一連の挫折の年であった。彼はハンフリーを大統領にするための組織の副委員長として活躍して来た。だがその努力も、ウエストコンシンとウエスト・ヴァージニアの予選会で、ハンフリーの敗北をみたに過ぎなかった。ウエスト・ヴァージニアの予選会で完敗したハンフリーが、大統領競争から身を引いた時、一九五二年と一九五六年にスチーヴンソンの強力な支持者であったフリーマンは、ケネディ支持へと其の立場をきりかえた。それはミネソタの民主的農夫労働者党の多くの人たちの希望に反した行動であった。結局、ケネディはこの党の英雄であったハンフリーを踏みにじってしまったのである。このニューイングランド人は、多くのミネソタの労働組合の役員たちにとっては余りにも保守的であった。しかも多勢の州農民の指導者たちの考えかたからすると、農業についての彼の成績はわるかったのである。

ミネソタの代議員団がロサンゼルスで集会を開いた時、彼らは大きく分裂した。この議員団を統制することができなければならなかった筈の知事は、あらゆる側からたたかれた。ハンフリーは最初、大統領として彼が希望しているのは誰であるかについて言おうとはしなかった。ミネソタのもう一人の民主党上院議員でカソリック教徒であるユードーヌ・マッカーシーは、ケネディ以外ならほとんど誰にでも賛成であった。誰でも知っていたとおり、代議員団の中の分裂は、副大統領の指名を獲得しようとするフリーマンの野心にとつての障害であった。

党大会が開かれた時に、フリーマンはケネディと席を共にして一時間戦略について語り合った。ミネアポリス・スター新聞が報ずるところによると「フリーマンは、ケネディが彼を報道記者たちにあわせるためにバルチモア・ホテ

ル九階の彼の部屋の入口へ連れて行つたので驚いた。新聞記者たちの質問に対してケネディはフリーマンを「副大統領候補のもっとも先端を行くものの一人である」と言つたのである」。

ミネソタの代議員団をケネディの方へつけようとして、いくつもの会合が長々と行なわれた。或る水曜日の夜に代議員団は長時間にわたつて協議会を開催したが、この協議会の結果、出席していたすべての人たちの友情は殆んど終りを告げてしまつたのである。フリーマンは自分が知事として再選されるための闘いは困難に直面していることを知つた。彼はケネディと一緒に副大統領に立候補する方をはるかに好む様になつていた。数年間、フリーマンとハンフリーの間には軋轢が進行しつゝあつた。しかしその夜、この軋轢は爆発して二人ははげしく言葉をやりかえし合つた。上院議員が現れた時、彼は副大統領候補としてフリーマンを支持すると言つたが、大統領候補として誰を支持するかについてはその時言おうとはしなかつたのである。

それから数時間後ハンフリーは、マッカーシーが指名する筈になつていたスチーヴンソンを支持すると発言した。こういう状態は、どれもフリーマンの助けにはならなかつた。そのフリーマンは最後の瞬間に、ケネディを指名する人にえらばれたのである。こういう状態になつた上は自分が副大統領候補として承認を得られないだろうということには、それまでの政治的伝統からフリーマン自身によく分つたのであつた。あげくの果に、彼が指名演説をはじめた時に大会場のテレプロンプターが正確に作用しなくなつてしまつた。彼は助手に対して手を振つて彼の演説の原稿を持つて来てくれるよう頼んだ。だが助手は彼の手振の意味が理解できなかった。フリーマンはテキストを利用し得ないまま、その烈しい演説をしたのであつた。

点呼がはじめられた時、分裂していたミネソタの代議員の一部は、彼らの代議員の一人はスチーヴンソンを指名

し、他の一人はケネディを指名していたという事実があるにもかかわらず、ハンフリーにその票を流してしまったのであった。ミネソタの共和党員たちは大きく書き出されている文字を読んだ。そしてフリーマンが彼の同僚である民主党員たちから痛手を受けたことを知ったのである。かくて共和党員たちは最後には、彼をやっつけることができることを確信したのであった。

多くのミネソタ人と同じく、オーヴィル・フリーマンはスカンジナビア人の子孫である。彼の祖父はスエーデンからこの国にわたって来た。そしてミネソタ州ズンブクタ近くの自作農場入植者となったのであった。フリーマンの父親はミネアポリスに小さな男子用洋服店を経営していた。一九一八年五月九日生まれのオーヴィルはミネアポリスの公立学校を出、ミネソタ大学に入った。彼の生活様式がきまっていたのは大学においてであった。ハンフリーによると、「大学時代においてさえも、オーヴィルは悪鬼の如く働いた。」彼はいつも四種類位の仕事をかかえていた。彼らに政治学を教えたエヴロン・M・カークパトリック教授によると、ハンフリーは「知識をそのまま呑込んだ」が、フリーマンは彼が知ったことを実際仕事にあらわさねば気が済まなかった。「フリーマンは私がそれまで会った学生の中で、もっとも頑強な決意を持っていた」とカークパトリックは言っている。「彼はハンフリーのように華やかではない。だが彼は個人として充分に鍛錬されて来ている。フリーマンはジブラルタルの岩石のような性質を持っている。ひとたび決意すれば彼は断固として行動する」。

多くの仕事を持っていたにもかかわらず、フリーマンは時間を見つけてフットボールチームのクォーター・バックをやったり、フィー・ベタ・カップ俱樂部の会員になったりした。一九四〇年に、彼はマグナカム・クラウデ（第二位優等）で卒業した。戦後、彼は法学士の学位を得るため学校にもどった。経済的不況の時代に、彼は学位取得の課

程（アンダーグラデュエイト）にいた訳だが、彼の家族が献身的に奉仕していた共和党（グラント・オールド・パティー）をカークパトリックの影響を受けて脱落し、民主党員になったのはその頃のことであった。

卒業の翌年フリーマンは自ら志願して海兵隊員となった。それからヴァージニア州クアンチコの士官学校に送られた。海外に派遣される前に彼は、ノースカロライナ、ウインストンサレムのジェーン・シールズと結婚した。彼女は大学で彼より二年後輩の政治学を勉強していた学生であった。彼女もまたフィー・ベタ・カップ倶楽部の会員であり家庭に堅固な影響を与えていた。フリーマンは自分自身の問題も彼女に打ち明けて話した。一九六〇年に彼が敗北した後は、彼がまた平静な気分にもどるまでに彼女が貢献した程度は、はかり知れないものがあつたという。

不況時代も海兵隊時代も、共にフリーマンに影響を残した。また国家公務員としての彼の型にも影響を残しているのである。「不況は行動計画が必要であるということを私に教えてくれた」と彼は語っている。「最前線の指揮をとって丘の中腹まであがって来ている時に、別の側から攻撃すべきであつたなどという判断は無用である」というのは、海兵隊時代に彼が叩きこまれた教訓である。平和の問題は性質がちがっており、しかも見解の調整と妥協がなければならぬということを彼は認めている。「だが貴方がたたかっている時に、あなたは後もどりをしてはならない」と彼は主張する。彼の敵たちはこの決意の強さを知ることになった。戦後、このことを知らされた最初の人たちは、ミネソタの共産主義者であつた。

共産主義者たちを民主的農夫労働者党から追い出すためのたたかいは「私がいままでにやつた中でもっとも骨の折れる、もっとも攪乱的な、もっとも幻滅を感じさせるようなたたかひであつた」とフリーマンは言った。「多くの立派な人たちが間ちがった方向に引張つて行かれた。だが私たちがそのたたかひを始める頃までには、私に関するかぎ

り、その黒白ははっきりしていた。我々は何に對して闘おうとしているのかを知っていた。」

一九四六年に、当時ミネアポリス市長をしていたハンフリーの助手であったフリーマンは、民主的農夫労働者党の州書記に選ばれた。ハンフリーは一九四八年の上院議員選挙をちつと観察していた。そしてこの選挙に勝つためには彼の党そのものの内部が綺麗にならなければならない事を知った。民主的農夫労働者党の支配権を獲得しようとするハンフリー・フリーマンの運動は、最後の一票に至るまで組織化されていた。偶然にまかしてあることは何もなかった。黨員たちを共産主義の脅威に眼覚めさせる一方法として、彼らは「アメリカ人のための民主的行動協会」に加盟し、そして州内の色々な場所に支部を組織した。彼らは支持勢力を集めるために、政治的集会を順番にまわって歩いた。ヘンリー・A・ウォーレスが、進歩党の候補者として、大統領戦に出馬を声明した直後の一九四八年はじめ頃までに、ハンフリーとフリーマンは行動に移る準備をしていた。

前知事エルマ・ベンソンの監督下にある三十五人の委員から成る州執行委員会は、ウォーレスの味方であった。かくて二一七名の委員から成る州中央委員会の会合が召集された。このグループ内においてはハンフリーとフリーマンのかねての努力のおかげで、反共産主義者が多数を占めていた。この会合の最中に左翼の指導者の一人が、フリーマンはいつこの会合が開かれるかについて、あらかじめ全員に知らせなかったと、偽りの非難をした。激怒したフリーマンはその非難をした人に向って勢よく近づいて行った。「私はその時の光景を決して忘れないだろう」と其の場に居合わせた一人の人が回想している。「フリーマンがその男のところへつく前に、その男は会場から逃げてしまった」。

フリーマン・ハンフリーのグループは票を獲得した。フリーマンは州委員長に選ばれた。そして選挙人名簿がつくられた。そして彼らはトルーマン大統領の再選を誓ったのである。ベンソン・グループは、この政策に従うことを拒

否した。そしてウオーレスを支持する選挙人名簿をつくったが、この名簿を共和党の書記は正式に認めたのであった。フリーマンとハンフリーはこの事を州最高裁判所へ提訴した。州最高裁判所は国務長官の意見をひっくりかえし、トルーマンの選挙人名簿を認証するよう共和党の書記に命令した。共産主義者が追放されたのでハンフリーは、フリーマンを選挙事務長として上院に立候補し、そして当選した。

二年後、フリーマンは司法長官の候補者となったがなれなかった。一九五二年に彼ははじめて知事選挙に出馬した。そしてここでもまた失敗した。一九五四年に当時三六歳のフリーマンは知事に当選した。彼はそれまでの十六年間に於けるミネソタ州の最初の民主党の知事であった。

フリーマンが一九五五年一月五日に行なった就任演説は、一九六一年のケネディの軍備強化呼びかけにどこか似ている所があった。「我々の州は非常に危険な点に立っている」と新知事は語った。「我々が今日ミネソタにおいて当面している挑戦は、本当の意味で、従来の我々の危機の時代よりもより複雑であり困難である」。彼はまた、ミネソタ州が、教育、財政、農産物価格および州政府の機構の面で、危機に直面していると言った。彼は行動することを約束したのである。

強力な組織者であるフリーマンは、多くの官僚たちの感情を害するような政府構造の改革をやつてのけた。政府内の諸手続を改善し、役人たちを絶えず敏速に働かしておくために、各部各局内に永続的な自己監査制度を設けようという計画を立てた。ミネアポリス・スターは「やがて、若くしてこの職についた一人の人、ハロルド・E・スタツェン以来行政管理について最も基礎の安定した知事となった」と書いたのである。フリーマンは州の福祉計画を推進する広汎な計画を立てた。州公務員および地方公務員のための社会保障制度を拡大した。そしてこういう彼の計画の費

用にあてるため、税金をひきあげて自分の評判を悪くした。彼が役職についている間は、州の財政は毎年通常予算をうまわったのである。

フリーマンは議会との関係において余りにも厳格で、命令的で、非譲歩的で、融通性がないと共和党員たちは非難した。一人の有能な観察者が述べるところによると、彼の大きな弱点は「がむしゃらな頑固さ、指導と独裁との間の区別を見分けることができないことであった。彼はまだ海兵隊の中尉なのであった。」

当時の彼の友人たちは、フリーマンは生気に満ちた人であるとは言い得ないし、機智にかけるところがあり、社交性も足りないようだということを認めた。だが、彼の能率性がこの様などんな欠点もおぎなっていると彼らは考えていた。彼は気取りが嫌いだし、閑談も嫌いであった。彼は心に目的を持っていて時には、前進し烈しく突進した。農務長官になった後、彼は彼が無能であると思っている一文官が重要な役職についていることを知った。「ハンフリーだったら、そのような人をどかすためには、書物に見られるような、あらゆる遠まわしの方法を使ったであろう」と一人の同僚は言った。「だがフリーマンは、私はただ彼を自分のところに呼びよせる。そして彼に私は君を必要としない」と告げる」と言った。その男は、フリーマンが農務長官としての宣誓をした後、一ヶ月もたたないうちにほかの省に移動させられたのである。

一九六〇年の選挙戦でフリーマンに対抗した共和党のエルマー・アンダーソンは、次のようなスローガンを上手に使ったのであった。「ミネソタは、怒りっぽい政府ではなく、友好的な政府を必要としている」。アンダーソンは、このスローガンが、多くのミネソタの有権者たちの心を動かすだろうということを、知っていた。ミネソタの有権者たちは、フリーマンが議会と数多く争ったことを覚えてはばかりでなく、一九五九年の後半にフリーマンの身辺で行

なわれた労使の紛争のこともあるから、有権者たちの心は動くだろうと彼は考えた。十一月三日にアルバート・リーのウイルソン株式会社工場で、包装工場労働者組合の組合員によるストライキが行なわれた。暫くすると会社は、農夫やその他の非組合員をやとって、工場での作業をはじめた。ストライキをやっていた人たちは投石したり、工場に入ろうとする労働者たちの車をひっくりかえしたりした。

フリーマンは、首席労働調停官と州公道委員を、調査のため現場に派遣した。彼らにはその紛争は更に重大に感ぜられた。十二月十一日の夜フリーマンは、ミネアポリス西方のカンディヨヒにおいて、新しく建設された小学校の開学式で講演をしていた。ちょうど彼がその建物を去ろうとしていた時に、彼の秘書から連絡があった。それによるとアルバート・リーにいるフリーマンの代理人たちが、彼に会おうとして入ることができず、険悪な状況が生まれているというのであった。学校から電話をかけて殆んど二時間相談した後、フリーマンは命令を発して州兵を派遣し平和を維持し、かつ工場を閉鎖せよとの訓令を与えたのであった。もしもこの時フリーマンが州兵を召集せず、工場がそのまま開かれていたならば流血の惨事が起ったであろうと、フリーマンの顧問たちは彼に言った。

ウイルソン株式会社の社長ジェームズ・D・クニーはすぐにフリーマン知事を非難した。そして彼の行為は「まったく勝手な気まぐれ」であると言った。フリーマンは法と政治を維持するためではなくて、「工場を閉鎖する」ために行動したのであるとクニーは言った。ミネアポリス・スター新聞は、この彼の意見に同意せず、次の如く述べた。「アルバート・リーに燃えあがっていた暴力の焰は嘆かわしいものであった。だが、紛争の拡大を防止するため地方の法律執行官が援助を求めた時、州兵の派遣を要請することは必要だったのである。」

フリーマンの行動の結果、流血は避けられた。だが会社は裁判所で、会社の権利が侵害されたと主張して勝訴し

た。会社は工場からの軍隊の撤退と包装工場の再開を執行するため強制命令の発出を求め、その命令を得た。連邦裁判所は、アルバート・リーにおいては軍隊統治の必要はないと言った。さらに裁判所はフリーマンが「暴徒の支配に降伏し」たとして彼を批評したのである。フリーマンは裁判所の命令を受諾した。そして六週間後、ついに最終的な解決が得られたのである。だが裁判所に対する怒りにみちた回答においてフリーマンは、もしも同じような状況が再び起ったら「私はアルバート・リーでやったのと全く同じように行動するであろう」と述べたのである。この言葉は幾人かの有権者たちの耳には、彼が法を無視して行動するつもりだと言っているように聞こえたのであった。そしてこの言葉は、彼を攻撃するのに利用された。批評家たちは彼は独裁的な野心を持っていると非難した。一九六〇年に彼が敗北したもう一つの要素がこれであったのである。

知事としての経験は、フリーマンの理論に柔軟性を与えた。そして一つの問題には、いつも少なくとも二面があるものだということを、彼に教えたのである。たとえば彼は農務長官として消費者の利益を忘れないこと、そして農夫の諸問題に対して理論的に接近するよりも、むしろ実際的な立場をとることを約束したのである。

フリーマンが上院農務委員会へ農務長官就任の同意を得るため出席した時、彼は「私は専門家としてこの委員会に出席しているのではない。私は農業についてのすべての問題に答えられるとは思っていない」と言った。だが、彼自身の農業についての業績は明らかであった。そして彼の農業上の立場は、エルザ・タフト・ベンソンの立場が反対側で確固としているのと同じように、こちら側で確固としていたのである。彼は確固として高価格政策を支持しておりまた生産制限にも賛成の立場をとっている。ミネソタ州の知事として彼は、下院および上院の農務委員会で、ベンソンの考えかたをするべく批評する証言を屢々したのである。

「個々に行動している数百万の個々の農夫たちが、変化する要請に応ずるため必要な調整をすることは不可能である」とフリーマン知事は一九五六年の上院委員会において述べている。ベンソン計画の間違ひの一つは、もし余剰生産物が排棄されてしまえば、需要供給の法則が働いて農業問題は解決してしまうであろうという前提を持っていることであると彼は言った。「そうはいかないのである」とフリーマンは言った。「低価格は生産高を下げるどころか、これを増大せしめる」。

その後の証言で彼は、農夫たちが必要としているのは、市場価格が農夫たちに公正な報酬をもたらすように、まず第一に供給を需要に調節するような計画であると、証言している。生産面積を制限しても、農夫たちはエーカーあたりの生産高をつりあげることができるので、面積制限の方法は非効果的であるとフリーマンは言った。そしてその代りに、全国的に各地域社会毎に、販売総額の割当をすることを提案した。各農夫には販売額の分担が割りあてられ、それ以上売ることを禁止された。「各地域社会の栽培者たちは、農務長官と協力して、彼ら自身の計画を立案することができべきである」とフリーマンは考えたのである。

「政府は、経営者や労働者たちと同じように、農夫たちが、彼らに公正な価格をもたらすような供給水準に、その生産高をおさえることができるような機構を、農夫たちのために設置すべきである。」と彼は言った。「かような価格は収入の一樣化をもたらすだろう。そして農夫たちが労働や経営や資本投下をすれば、その報酬として、農業以外の職業に従事している人たちが受け取る収入に匹敵するような、報酬が得られることを保証するだろう。」

特に議会内で既に大きな反対運動に遭っていたケネディ・フリーマン計画は、議会の拒否権に従うことを条件として各農場グループに対し、夫々自分自身の計画の立案を許可しようとしていた。もし農夫たちが平均的な収入を確保

するための生産物計画を發展させようと希望するなら、市場取引額の割当、命令、商品借款と購買、直接支払、輸出奨励金およびその他の手段が用いられることになっていった。農務長官の広汎な指揮の下にある選抜農民委員会は議会の決定に従うことを条件として生産物計画をつくり得ることになっていった。

ミネソタの農業問題について詳しい知識を持っていたにもかかわらず、フリーマンは一九六〇年十一月八日に敗北した後、親しい三、四人の同僚に対して、農務長官としての試練を「まぬがれない」と言ったのである。ハンフリーはフリーマンの言葉を額面どおりとった。だがフリーマンを支持している数人の人たちは、ハンフリーはフリーマンをもっと低い非閣僚的な地位につかせることには、まったく熱心すぎるほど熱心だと思った。十一月十一日にケネディはフリーマンに電話して彼の敗北について遺憾の意を表明すると共に、もう一度会って話す機会があるまで何かの計画を立てることを延期するよう彼に求めたのであった。何らかの仕事を提供しようという申出はなされなかった。そしてフリーマンは他の数人の知事夫妻たちと共に、自分も妻を同伴してラテン・アメリカの旅に出かけて行った。この旅で彼は多くのものを見、それに興味を持った。彼は余剰食糧を出荷する必要があることを知ったし、多くの国々で推進されつつある農業上の実験をその眼で見たのである。農務省で本当に何か重要なことを達成することが出来るかも知れないという実感が、彼の心にはおのかに生じはじめたのであった。彼の妻はもしも閣僚の地位が彼に提供されたら、よく考えてみたらどうかと彼にすすめた。知事として敗北したあとの精神的沈滞から脱却して来るにつれて、もう一度地位に挑戦してみたいという気持が彼をそそのかしたばかりでなく、彼を興奮させた。

「私は十五年間火線の上に暮して来た。そして私は選挙戦でつかはれてしまった。私は農務省よりもっと必要性のすくない仕事をしたと思う。だが私が農務省について色々考えてみる時、私はそれが嫌だとは言えなかつ

た。私は農務省は現代の最大の挑戦の一つを示していると実感した。もしも我々が自由国民として生き残って行かなければならないとしたら、我々は農業における豊富さの挑戦に応じなければならない。」

フリーマン以外の誰かを任命すべきであるという強い議会側の圧迫が、大統領選出候補に対してなされた。だが最初からケネディの気持は、このミネソタの人に傾いていた。彼は中西部から誰かを得たいと思っていた。彼は頑健で突進力があり、組織者として有能であるという理由から、フリーマンを好んでいた。だが彼は落選した人を閣僚に迎えることを、躊躇していたのである。彼はほかの候補者を探した。だが一人一人が彼の要求している要素にかけていた。考えなおせば考えなおすほど、彼は自分が欲しているのはフリーマンであるということに確信を持って来た。

十二月十五日に大統領選出候補はこのミネソタの知事に電話をかけて、農務長官になってくれるよう頼んだ。「彼は私を説得する必要はなかった」とフリーマンは後になって述べている。「私はそのつもりだったのである」。その日も遅くなってから、ジョージタンの家の雪のつもっている階段からケネディは、フリーマンを農務長官にえらんだことを発表した。ケネディはN街の彼の家の前で、寒さにふるえている報道記者たちに対し「彼はこの仕事に精力と行政能力を持ち込んで来る。また我々の国の利益に対する献身的な態度を持ち込む。そして彼は、農務長官の仕事をしつて貰うために、我々が得ることのできるもっともすぐれた人物であると私は信じている」と語った。

ハンフリーはフリーマンをからかった。そして彼にミネソタの有権者たちが知事の席から彼を蹴おとしたことは好都合だったと言い、「彼は農務長官という器ではない」と言ったかと思うと、「これは彼に新しい挑戦の機会を与えているから彼にとって具合がよいと私は言った。以前の仕事に彼はすこしあきあきしていた。そして今や彼は、何かにとりつかれている人のように、新しい問題に取組みはじめた」とも言ったのである。

何かものごとにとりつかれている多くの人たちがそうであるように、フリーマンの胃潰瘍はさらに悪化し、彼は食事の間に何回もバターミルクとクラッカーを食べなければならなかった。「彼の潰瘍は何もわるくない。やり甲斐のあるたたかいや見事な勝利があれば、なおつてしまうと私は彼に言っているのだ」とハンフリーは言った。「彼の前任者であった予言者のような農務長官エルザにくらべれば、格段の相違である。オーヴィルは現世的な人である。彼は海兵隊の中尉のような話しかたをする。だが彼は立派な教会人でもある。」

フリーマンが農務長官の役職についた翌日、一団の農民の院外運動員（彼の考えによると院外運動者は多すぎるし農業関係の圧力団体も多すぎる。また農民たちを競争的組織へ分裂させるような生産物の売込み屋が多すぎる）が彼をたずねて来て、或る特別の行動をとってくれるよう要請した。彼は彼らの議論を熱心にきいていたが、それからぶつきらぼうに次のように答えた。「私の統計はそういうことを示していない」。それが彼の回答のすべてであった。

烈しく突進して行つて時には融通性を失い、しかも自分のことを忘れて奉仕するような此の人が、外交や融通性もまた必要とされる過度に困難な複雑な仕事に、成功することができるだろうか。こういうような性行の人が、数十年にわたつて解決が回避されて来た農業問題の矛盾を、解決しはじめることができるか。彼が任命されたあとで、彼の旧友の一人は語つた。「オーヴィルは恐ろしくやり甲斐のある仕事をやるであらう。さもなければ、彼はまったく悲惨なことになる」。

誰もスチュアート・ユードルが内務長官として悲惨な閣僚になるだろうとは思つていなかった。彼は閣僚銜衝の中でもっとも論理的に選ばれた人である。あらゆる客観的なテストにより、彼はもっとも成功の可能性のある人であるということになった。彼の問題はフリーマンほど複雑ではない。そしてユードルはその人生のすべてを一つの問題意

識を抱いてすごして来た。ユーダルは勝とうとする強い意志を持った戦闘的人物であるが、彼にはまた、詩人的なところが、学者的なところがあつた。このことが、戸外活動を愛する彼の気持および国会議事堂における六ヶ年の経験と結びついて、彼をフリーマンよりも、もう一寸平静な人物にしていたし、また二点の間の最短の距離が必然的に最善の道であると考えられるような気持が、フリーマンよりもやや少ない人物にしていた。

一九五九年の或る日、ユーダル議員は国会図書館の詩学顧問であるロバート・フロストの話を聞いたが、議会の中の誰一人としてフロストに相談をかけ、彼の時間を奪おうとしないことに不平を述べたのであつた。長い間フロストの作品の賞讀者であつたユーダルとその妻は、その詩人を彼らの家に招待して、議員たちの一グループと共に食事をした。それはユーダル・フロスト相互賞讃会のはじまりであつた。二人は互いに他方に魅了された。大統領就任式に出席して、アリゾナ出身のこのがっしりした黒髪の若い男のすぐ隣にいた、やや前かがみの白髪のニュー・イングランドの人の写真は、ワシントンが容易に忘れ得ないものの一つとなつた。

フロストとの関係は「私の人生における本当に大きなことの一つであつた」とユーダルは言っている。「彼から私は人生について非常に多くのことを学んでいる。我々は偉大という言葉をだらしなく使い散らす。だがフロストは内部の偉大さを持つている。しかも彼は非常に単純な人間である。彼は人生というものは簡単なこと、小さなことに現れていると我々に教えている」。

それより数年前フロストは、詩は「よろこびに始まり賢こさに終らなければならない」と書いたが、それはユーダルの頭にこびりついて忘れることのできない考えであつた。「フロストは知恵と良識との結合を、その人間性の中に具現している」と彼は言っている。フロストが一九六〇年にアリゾナにユーダルを訪問した時、この国会議員は、六

人の子供のうち下から二番目の、当時四歳のデニスとこの詩人が、一緒にいる姿を素早く写真にとった。そして彼はこの写真を、その後内務長官執務室のデスク上に、常に置いていたのである。

さて、ユードルがフロストの「肉面的な偉大さ」を発見しつつあった頃、フロストは彼の年齢の半分の年齢でしかないもう一人のニューイングランド人の中の鋼鉄のような素質から、何ごとかを学びつつあったのである。ユードルはこの詩人との関係もまた「喜びにはじまり賢こさに終る」のだからということを知ったのであった。ケネディ上院議員は個人的魅力があつたにもかかわらず、ユードルは大統領候補としてのケネディについて多少の疑念を抱いていた。「だが我々が改正労働法についての闘争のまった中にはうりこまれた時、私の眼には、すべての人が大統領の中に認めている性質―すなわち敏速な洞察、確固とした信念および頑強さ―が益々はつきりと見えて来たのであった」とユードルは回想しているのである。「労働法の起草ということは、どの場合でも経営者と労働者を衝突させ、そしてもっとも恐ろしい圧力を生じさせるものである。ケネディはこれらの圧力を見事に耐えぬいた。事実彼は、圧力のもとで繁栄したのである。圧力のもとで立派に仕事をして行けるといふこと、これは大統領が持たなければならない性質である」。

このマサチューセッツの上院議員について、このアリゾナの国会議員が印象を受けたもう一つのこととは、「彼が有能な人物にとりかこまれていふことだった」。ケネディ内閣の当初の労働長官アーサー・J・ゴールドバーグ、副司法長官アーチボルド・コックス、大統領特別顧問ラルフ・A・ダンガン、それにユードル、これらの人たちが労働法についての長い闘争において、相並んで仕事をしたのであった。

ユードルがケネディについて彼の心を決めたのは、この闘争が終つてのちようやくのことであつた。「議員をやめ

た夜、私は午前三時頃ケネディの事務所を訪問した。そして貴方と一緒に仕事をして行くつもりだ」と彼に言ったとユーダルは言っている。彼はアリゾナに帰った。そして州内のあらゆるところに出かけて行って静かにケネディのことを推薦してまわった。アリゾナにおける民主党指導者の大部分は、リンドン・B・ジョンソンを支持していた。そしてこの州がテキサスの隣人を支持することは一般に当然の事と考えられていた。だがユーダルはそういうことを当然のこととは全然考えなかった。そして彼は党内にカール・ヘイドゥン上院議員や、以前に上院議員や知事をしたことのあるアーネスト・W・マクファラランドのような親分がいるのを無視した。州民主党大会が一九六〇年四月にフェニックスにおいて開かれた時、ケネディは三四の代議員票のうち二五票を獲得した。そしてロサンゼルスにおいてアリゾナは確実にケネディに投票したのである。

「一九六〇年の選挙は本当の意味の分水界の事件であり、私の世代におけるもっとも重要な選挙であると思つた」とユーダルは言っている。「あなたが誰を支持するのかを決め、勝とうが負けようが、彼と一緒に線路を下って行かなければならなかったのである」。

二年間の労働法闘争の間に、ケネディは自己の真価をユーダルに知らしめたのであるが、同じくこの二年間にユーダルは自己の真価をケネディに知らしめたのであった。二人は共に、チームスターズとの烈しいたたかひに関連を持つた。彼らはまた彼らのどちら側にもいる極端主義者に反対して、「穏健な」法案であると彼らが考えているもののためにたたかった。

一九五九年の下院の委員会における長い激しい論争の過程において、ユーダルはチームスターズからひどく攻撃された。チームスターズの弁護士シドニー・ザグリが「私の事務所に来て来た。そしてアリゾナにいるAFL・CIO

○の指導者たちに電話して、彼らに委員会における私の投票について言いつけるぞなどと出鱈目を言った」とユーダルは述べている。ザグリはユーダルに、労働者たちは彼と協力するであろうと警告した。

「その話は本当に私を怒らした」とユーダルは言う。「何の権利があつて君は、何が正しく何が悪いかについて自分を偉大な判事だと思いこんでしまうことができるのかと私はたずねた。私が言い終る前に彼は自分の主張を打ち消し、正しい労働運動についての私の見解は正しいかも知れないと言った。私は彼のためであろうと、或はその他誰のためであろうと、ただ出鱈目に賛成する人にはならないということを明らかにしておいた」。

内務長官になってからまだ一ヶ月もたたない或る別の機会に、ユーダルは、自分は大きな政治ゲームをやつて行く方法を心得ていると公然と語ることによつて、平静さと珍しい位の率直さをあわせ持った、飾りけのない政治的素質を示したのであつた。「私の目的はこの省の中で立派な仕事をすることではない。大統領の計画をあらゆる部門で実践させて行くことである」とユーダルは言った。「過去のすべての強力な大統領は、支持を得るためにあらゆる適正な手段をもちいた。そして私は、私の大統領が、強力な大統領になることを望む」。

闘争はまず下院規則委員会の人数をふやそうという政府の方針に行なわれた。これは政府の提出する法案がこの伝統的な途上の障害を通過して本会議に提出され、投票による採決を得られるようにしたいという希望から生まれた方針なのである。ユーダルは早速この仕事にとりかかった。そして内務省の決定に特別な利害関係を持つ数人の議員たちに対して、規則改正法案に賛成投票するよう求めたのであつた。下院の共和党の指導者であるインディアナ州のチャールズ・A・ハレック議員がユーダルの活動について耳にした時、彼は内務長官は議会に不当な圧迫を加えていると不満を述べた。自分の活動について新聞記者会見でたずねられた時、ユーダルは自分は何も新しいことはし

ていないし、不正なこともしていないと言った。

「チャーリー・ハレックは自分のことを「元気のいい活躍家」と称している。そして自分は物事を徹底的にやりぬく性質だとも言っている。私がおそれていることは、ほかの人がまた同じように徹底的にやると、彼はそれを好まないのではないかということだ。」とユードルは言った。

驚いた一人の記者がたずねた「あなたが今言われた人たちは間違いなく投票するのですか」「一票か二票は確実だ」と同長官はニヤニヤ笑いながら答えた。

ユードルは一九二〇年一月三十一日にアリゾナ州セント・ジョーンズで生まれた。彼の祖先はこの地域にもっともはやくから移住して来たモルモン教徒の仲間であった。彼の曾祖父のヤコブ・ハンブリンは初期の開拓者であり、インディアンとの紛争に調停役をつとめた人の一人であつて、西部の歴史において「皮の靴下のモルモン」として有名であつた。スチュアートの父親、故レヴィ・S・ユードルはアリゾナ最高裁判所の裁判長を長年やつていた。

「私の父親は、人生の生きかたとして、公的な職務をえらんだのである」とスチュアートはかつての彼の父親について語った事がある。「彼は物質的に大きな遺産は残さなかつた。だが生きかたの模範を示すというやりかたで、最善のものを残したのである。人のなし得るもっとも素晴らしいことは、公共奉仕をすることであるという感じを、彼は我々すべてに残してくれた」。

一九五五〜一九五六年頃、ユードル一族の約百五十人の人がフェニックスに集まって家族の懇親会を開いた時、アリゾナ・リパブリック新聞は「アリゾナに「忠誠な家族」がいるとすれば、それは疑いもなくこの珍しいユードル一族のグループだ。ユードル一族からは国会議員が出たし、アリゾナの最高裁判所判事が出たし、上級裁判所の判事も

出たし、州議会の議員も出たし、また誰かが骨を折って残している記録よりも多くの郡役所や市役所の役人が出てゐる……彼らは民主党の支部も持っているし共和党の支部も持っている。仲間のモルモン教徒たちと同じく、彼らは勤勉に働いて来たし質素に暮らして来た。そして荒れはてた領土だったアリゾナを、繁栄している州にまで建設するのを手助けしたのである」。セント・ジョーンズの公立学校を出たのち、スチュアートは東アリゾナカレッジに一年間通い、それからアリゾナ大学に転学した。彼はペンシルヴァニア州およびニューヨーク州においてモルモン教の宣教をするため、二年間勉強を中断した。戦争がはじまった時、ユードルは空軍将校になろうと思った。だが爆撃手の訓練学校を落第し、下士官になった。爆撃手として要請される精密さにかけるところがあったのである。彼はひどく落胆した。「私は読書と勉強に身をうちこんだ」と彼は最近回想している。「私は私が駐在している部隊にそなえられてある図書をすべて読みあさった。これは私の人生において本当に実りの多かつたことの一つであった」。

戦後スチュアートは大学に帰り、一九四九年に法学士の学位を得た。一九四六年当時彼は大学のバスケットボールチームでオール・コンファランス・ガードをやっていたが、同年マヂソン・スクウェアガーデンにおける招待トーナメントに出場した。だがアリゾナ大学は七七対五四でケンタッキー大学にまけた。同年スチュアートは、アリゾナ州メサのアーマリー・ウエップと結婚した。彼女に会ったのは大学において彼が法律を勉強していた頃であつて、彼女は学位取得前の学生であつた。亜麻色の美しい髪を持った彼女は夫と同じように生氣に満ちており、また夫と同じように多くのことに關心を持っていた。このユードル夫人は政治的にも彼にとつて大きな助けとなつていたのである。「私はスチュアートが好きだ。だがリーは素晴らしい」というのが彼らの友人たちの共通した感想であつた。彼女はあたたかくて陽気であつた。一方、彼女の夫は友好的でやさしくはあるが、どこか俊敏なところがあつて彼の心はいつ

も手元の仕事のことには奪われていた。スチュアートを批判して「学究的だ」という人も幾人かいた。彼には人間味ある性質が多くあるにも拘らず、彼は社交的ではなかった。スポーツをしている時とか、あるいは家族と一緒にハイキングに出かけている時を除いては、この酒も煙草ものもない人には、気軽に陽気なところは殆んど感じられなかった。彼は戸外が非常に好きであった。だが自分で狩りに行ったり、釣に行ったりすることはなかった。忙がしい生活であったにもかかわらず、ユードル夫妻とその六人の子供たちは、密接に結びついた家族であって、キャンプやハイキングや、山のぼりにいつも変らぬ興味を持ちつづけていたのである。彼らは内務省の管轄下にあるすべての公園を、一緒に踏査して行こうとしていたのであった。

ユードルが自分の弟のモリスと、タクソンにおいて法律業務を開業した時も、時間が惜しくてたまらなかったが、ケネディ内閣の閣僚となっても、それと同じ位彼は急がしかった。一部には運動のために、一部にはおそいエレベーターを待つ時間を避けるために、彼はよくヴァリー・ナショナル・バンク・ビルディングの彼の事務所まで、沢山の階段をかけあがって行ったり、彼の友人は思出話をする。彼は地方の市民政治や民主党の政治問題に強い関心を持っていた。そしてその地域の二つのちがった学校の評議員もつとめていた。（数年後、ユードルが国会議員になった後、タクソンの或る高等学校の校長は、連邦政府から教育補助金を獲得するためのもつとも「論理的な方法」は、ほかの選挙区の人たちが「スチュアート・ユードルのような議員をもつと選出することである」と言った。）

一九五四年にユードルは、民主党議員ハロルド・A・パッテンがやめて行くについて、その議席をうめるべく民主党から第二期議員に指名された。以前にゴールドウオーター上院議員の行政補佐官をしていたヘンリー・G・ジブフが共和党の指名を獲得した。ジブフは彼の民主党の対抗者に「左翼」のレットルをはりつけようとした。ジブフによ

るとユードルは、アメリカ在郷軍人会に対抗してつくられた超自由主義的なアメリカ退役軍人委員会の協力者であり、労働権利法に反対であり、世界連邦主義者同盟の指導者であり、進歩党の結成を支持し、左翼の国際鉱業・製造業精錬業労働者組合から財政的な支持を受けたことがあるというのであった。

ユードルは、自分は労働権利法に反対したと答えた。だが彼は鉱業・製造業・精錬業労働組合から、財政的支持を受けたことはないと言った。彼はまた「私が一九四八年に進歩党を支持した」というジプフの言葉は「つらの皮の厚い嘘である」と明言した。彼がした事は、アリゾナにおける大統領候補者決定選挙に、進歩党が候補者を立てることができるような許可申請に署名したことであった。「それはともかく党の承認を得てやった」ことではなかったとユードルは一九五二年に有権者に向って語ったのである。「だが、それはむしろ民主的手続に対する私の信念を確信した行為であった」。

彼が決してウオーレス一派のものたちに魅惑されたことはないという彼の主張の正しいことは、彼のそれまでの記録が示している。ヘンリー・ウオーレスが進歩党の大統領候補であった年の一九四八年に、予選会においても一般選挙においてもユードルは力強く民主党員を支持したのであった。予選会において彼は知事候補であるリチャード・ハーレス議員のタクソン地区選挙事務長であった。選挙運動時にはユードルはピマ郡民主党中央委員会の副委員長であった。「私はトルーマン大統領および民主党の公認候補者のすべてを当選させるために、全力をつくして働いた」とユードルは主張する。「私はいかなる方法によっても進歩党を支持したこともないし、援助したこともない」。

ユードルは有権者たちに対して、貴族やその他の高貴な人たちが、王座の右側にすわり、人民の代表者たちが王座の左側にすわったということから「左翼」という言葉がつけられたのだということ指摘した。そうして彼が左翼で

あるのは本当であると言ったのである。「その意味で私は左翼であるという有罪宣告を甘受する」と彼は言った。「さあ、この言葉についてそれ以上の無意味なことを考えないことにしよう」。ユードルはこの意味において、自分を左翼であると考えていたのである。そして彼の政策に反対する人は、ハロルド・イックス元内務長官が特殊利益の代弁者に反対して、彼が公共の利益であると信じていることを弁護するにあたって示した頑固さと、同程度の頑固さを、彼の中に見出した。

だがその最初の選挙戦の時ににおいてさえ、彼は両党共通の支持と行動が重要であることを知っていたのである。その年、他の多くの民主党員がそうであった如く、彼はアイゼンハワー大統領の大きな人気を認めた。アイゼンハワー大統領にたたかいを挑もうとする彼の試みが、まったく戦術的なもののように思われたにしても、それはまた当然たるべき事の前駆でもあったのである。彼は狭量な党人には決してなろうとはしなかった。一九五四年に彼は有権者たちに対して、自分はジプフよりも数多く大統領を支持するだろうと語った。そして彼は「ジプフのクォーターバックにあたるバリー・ゴールドウォーター上院議員」について、「この上院議員は八三議会の会期中の重要な投票の三分の一以上」をアイクに反対投票をしたのだと語ったのである。ユードルは投票の六二・一パーセントを得てこの選挙に勝ったのであった。

ユードルの国会議員選挙区は、フェニックスを除いた全アリゾナ地区を含んでいた。彼は下院の他のどの議員よりも自分の選挙区の中に、多くのインディアン、インディアンのための保留地、および国立公園地域を持っていた。現在と同じく開墾と動力開発計画が当時の彼の基本的関心事であった。事実、彼の選挙区が抱えていた問題は内務長官管轄事務の縮図であったのである。彼が国会議員になった時、彼が下院の内務および隔離地域問題委員会の地位を求

めその委員に任命されたのは当然の事であった。彼が委員になったもう一つの委員会は、下院の教育・労働委員会であつて、彼のもう一つの主要な関心事を管轄しているのである。

他の大部分の議員以上にユードルは、下院の討議対象となるほとんどすべての問題にわたつて、広範囲の関心を早速示したのであつた。彼の読書範囲はひろく、彼の意見には偏狭なところは全く見られなかつた。問題に直面すると彼は独自のやりかたで、それに対する自分の立場をはっきりと決めた。彼はある場合にはアイゼンハワー大統領を批判し、ほかの時には彼を支持した。この共和党の大統領が、学校における人種差別を禁止する一九五四年の最高裁判所の判決を支持する旨確言するのを拒否した時、ユードルは批判的な態度をとつた。「判決は必要なものであり、賢明なものであつたと思う」とユードルは述べた。だが彼は、連邦政府の教育補助法案のポウエル修正を通過させるために奮闘努力した。補助法案には人種的差別が撤廃されない学校への資金援助禁止が規定されてあつたのである。ユードルは建設的な立場をとつた。裁判所の命令には同意しながらも、差別撤廃に伴なう損失が特に大きいので実行に移つてない学校に対しては、資金補助ができるような修正案を彼は提出したのである。

一九五八年に民主党全国委員長のポール・バトラーが、南部の民主党員を除名しようとした時、ユードルは彼らの弁護のために立ちあがつたのであつた。「南部の民主党員の大多数は、市民権の問題について穏健な立場をとつてゐる」とユードル議員は述べた。「彼らはこの問題の解決に向つて努力しようとしてゐる人たちである。また党にとつて名誉な人たちである。市民権についての問題を解決する道を見出すためにも、我々は彼らが必要としてゐる。もしも……バトラーが穏健な人たちを除名しようとしてゐるのなら、彼は無用なことをしてゐる。彼が極端な意見を抱く人たちだけを除名しようと希望してゐるのなら、私はその動議を支持する」。

同年、ニューダルは強力な民主党中央議員たちにお説教をした。彼の考えによれば、これらの上院議員たちは絶えず国防費の増加を主張することによって、党の面目をきずつけているというのである。「これらの軍備競争の偉大な弁護者たちは民主党の顔を示しつつある。そしてその顔は、もしも党の顔だと看做されるなら、党にとって非常に有害になるような顔である」と彼は語った。国防を強化することには賛成であると彼は言った。「だが意味のない軍備競争を終らせるために努力することも、同じように重要である」。新しい核兵器の開発が成功すればするたびに、この国の安全度がより大きくなる代りに、現実においては「核戦争の最後の大決戦の危険性をさらに強調することになるのである」。

一九五六年にニューダルは下院外務委員会において、彼の選挙区においてはほとんど関心を持たれていないが、彼が強く関心を抱いている或る提案に反対の証言をするため、発言許可を求めた。委員会は、外国の領域内に駐在するアメリカの軍人に対して、外国に刑事裁判管轄権を与えていない諸条約の改訂を求める決議案を審議中であった。

ニューダルはこの決議案は「アイゼンハワー大統領をおどそうとしているのだ」と証言した。彼は、下院議員の誰一人として敢て反対する人がいないので、ここで発言せざるを得なくなったのだと言った。「この争いの中で何故民主党員が、政府の肩を持たなければならないのか、とあなたがたはお尋ねになる。答はさわめて簡単である。この条約は外交問題において、超党派的な取扱を要するもつとも重要な事項の一例であるからである」。この決議案はついに否決されたのであった。

その前年の下院における演説でニューダルは「コンダグレン^ヨナル・クオーターリー」に掲載された計算表では、彼は外交政策に関しては、アイゼンハワー政権を一〇〇パーセント支持している人とされている事に言及した。「この事は

民主党員としての私を全然困らせない」と彼は言った。「事実、私はこのことに誇りを持っている」。ジュネーヴの頂上会談の結果として、もしも大統領と國務長官が不人気を買うようなことをする必要に迫られたら、下院は彼らを批判する手をゆるめることが望ましい、とユーダルはその同僚に語ったのである。「我々は説得される準備をしておくべきだ。そしてもしも彼らが正しいのなら、彼らを支持すべきである」と彼は言ったのであった。

農業問題に関しては、ユーダルの独立不羈の精神、或はまた誰かの呼びかたにならえば、彼の偏狭さが彼の同僚オーヴィル・フリーマンとの衝突の原因になったかも知れない。ユーダルは下院議員の当時、高価格支持とエーカー数基準の統制に反対であった。いくつかの場合において彼はエルザ・タフト・ベンソンの勧告を支持した。エーカー数基準の統制が「アリゾナの能率的な棉花生産者に有利だ」とは信じられないと、彼は説明した。ユーダルは、中西部の共和党員と南部の民主党員によってつくられている農場ブロックは、あまりにも長く農業政策を固定化し、かつ支配して来たと非難した。「吾々の現在の農業計画が家族単位の農民を保護してくれるという神話を、完全にほうむるべき時は来たのだ」。彼はさらにつけ加えて、今や議会が将来を見つめた賢い農業計画を立案すべき時であり、「くさっている現状の維持を望むべきではない」と言った。

ユーダルは保守的な勢力が支配的な、教育・労働委員会における経験を、議員となった当初に持っていた。その結果として下院の組織と能率を強化しようという努力に、はやくから関心を持つようになった。ノースカロライナ選出の民主党議員で委員長をしていたグラハム・A・バーデンは、鉄のような手で委員会を牛耳り、ユーダルや民主党の同僚たちが賛成していた最低賃金法案、改正労働法案、および教育法案に反対した。一九五七年にユーダルとその同僚たちは委員の任命と小委員会の組織に関するバーデンの権限の一部を削減しようとした。この試みは失敗したが、

バーデンは災の前兆を見たのであった。翌年彼は、ユードルたちが求めた権力削減案のほとんどすべてを容認する一連の新規則を提案して、ユードルたちを驚かしたのであった。

ユードルがそのために運動したその他の改革案の中には、下院議員の任期を四年間にする案、委員会の委員長の権限を制限する案、議会の調査権限の使用度をふやし、且つ、使用の方法を改善する案が含まれていた。小額の選挙費用寄付を奨励するために、彼は百ドル以下の政治寄金を免税にする法案を提出した。そしてついに彼は、大統領の任期を二期に制限する二一条修正の廃止を実現するための運動もしたのであった。

ワシントンにおいて大いに共鳴を得たユードルの提案、また内務長官としてその実行を彼自身支援する立場にあった提案は、すくなくとも死後五〇年たつまでは、たとえ誰のものでも、ワシントンにその彫像をたてることを禁止するというものであった。「同時代の人は歴史の中における彼の位置を判断するには、明らかに不適當である」とユードルは下院において語った。「同時代の人が彼らの指導者について判断を下すということは、愚かな出しやばり行為である」。彼はリンカーンの記念物が献呈されたのは、この偉大な解放者が死んでから六〇年後であり、ジェファソンの記念物が献呈されたのは、ジェファソンが死んでから百年以上たつてからであるという事を述べた。「もっとも深い意味と芸術的な完璧さを持つこれらの記念物の建造を思いたち、これを実行したのは、個人的な友人たちではなく子孫たちであった」とユードルは言った。

ユードルが彼の後に残しておきたいという記念物は、自然資源の偉大な保護論者としての記録であった。彼はケネディ大統領がセオドア・ルーズベルトと並んで、此の国の資源を保護するために偉大な業績を残した人として位置づけられることを希望していた。ユードルは内務長官に選ばれたあとで「私は一九六〇年代についていくつもの大きな

構想を抱いている」と言った。安い費用で塩水を真水にかえること、それが彼が心にえがいている事の一例であった。「もしも我々がロシア人たちをだしぬいて塩水を使用可能なものにする低費用で効果的な方法を発見するならば、この事は平和の縁（ふち）で行われている競争よりも、世界のある地域に於てもっと遙かな重要性を持つであろう」。

コロラド選出の共和党上院議員ゴードン・アロットが公私の動力開発の關係についてユードルの意見を求めた時、このアリゾナ人は、私は公私混合体制がいいと思っており、独断的な意見は持っていないと答えた。「だが次のように言えるのではないか。我々は大きな河川についての組織を持っているし、これらの河川資源の多くは公共の資源であるから、これらの資源は国民の幸福のために開発する必要があるように私には思われる。だが私はあらゆる状況のもとで一つの計画を追い、厳格にその計画どおりにやって行こうとするような固定した考えは持っていない」と力をこめて付加したのであった。

「この国のすべての河川流域の全面的かつ包括的な開発」が望ましいということ、彼は多くの機会に明らかにして来ている。一九五五年に行なったある演説でユードルは、内務長官の所管である他のすべての複雑な問題とならんで、流域開発および動力計画についての彼の考えを述べた。国会議員としての経験は、「国家目的を第一に置く」必要を彼に教えた、彼は述べている。幅の広い責任感を養成することが大切であるし、相争っている地方的偏見を正しい視野に導いて行くことが大切であると彼は言った。

公有地、油資源、森林資源を保護し、水や空気の汚染を防止し、*“すべてを包括する國家的水資源計画”*と彼が称しているものを推進し、そしてインディアン種族を管理するにあたっては、公共の利益をもっとも優先して考えつつ、プラグマチックにこれを実行して行こうとユードルは決意していた。自分の国会選挙区内に十万のインディアン

をかかえていたこの人は、各種族はそれぞれ異なっており、夫々の取扱方法は別々にする必要があると信じていた。

ユーダルの穩健な言葉を、弱さの兆候であると考えた人は、後に驚かされる結果となった。ユーダルは例えばフリーマンよりも、表面上積極的な進取性がやや少なかった。だが彼はフリーマンと同じく物事をやりぬいて行く忍耐力を持っており、筋違いのことをすぐに見抜く能力を持っていた。フロンティア・マンであったユーダルにとっては、「ニュー・フロンティア」は言葉以上の実体であった。彼は国民が時間と競争していると考えていた。非常に多くの原野が急速に開発されつつあったが、たとえば彼はこのことに関して、ケネディは「まさにセオドア・ルーズベルトと比肩し得る保護者として記録を残す最後の本当の機会に恵まれているのだ」と信じていたのであった。公園の改善のために、非常に進取的な国家計画を実行して行くことをユーダルは約束した。「わが国の人口はリクリエーション資源の開発よりも、はやい速度で増大しつつある」と彼は信じていた。「我々は新しい突破口をひらき、新しく偉大な努力をかたむける必要があると思う」。

大統領も内務長官も、特に東部に遊園地を増設したいと思っていたし、さらに土地を買って海岸に公衆のリクリエーション地帯を設けたいと思っていた。彼らはケネディが多くの夏をすごしたことのある美しいケープ・コッドに眼をつけていた。当時、この地の海岸は、急速に私有地化されつつあったのである。

ユーダルは一定の形式を守って行こうという気持は持っていなかった。だが内務省が関心を持っているすべての分野を彼は実践して行こうとしていた。戸外に大きな世界を育成し、かつ、それを保護しなければならないと心に誓っていたこの男は、彼の進路を「妨害する者」を一目で見抜く能力を持っていた。内務省が関連を持っている分野には多くの妨害者がいた。これらの妨害者は、政府は消極的な役割をすべきであると考えていたのである。だが、ユーダ

ルが望んでいたのは測定し得る結果であった。そして個人が国民の福祉を保護できない場所では、それを為し得るのは政府であり、政府はそれをしなければならないと彼は考えていたのである。

(参考資料省略)